

放送教育の父 西本先生

布 留 武 郎

放送教育の父（The Father of School Broadcasting in Japan）というのは、昭和28年先生がアメリカ合衆国政府の賓客として、同国内を講演旅行されたとき、ニューヨークタイムズが先生の業績をたたえて贈った名称である。日本の学校放送は今や世界最大の規模と組織をもち、国際舞台で華やかな脚光をあびているが、35年前、西本先生が大阪中央放送局にあって、学校放送の開設にあたられた時代に、誰が今日の隆盛を予見しえたであろうか。その頃ラジオは逡信省（現在の郵政省）の完全な統制下であり、一方、義務教育は文部省の完全な統制下において、学校放送に手をつけることは、両者の権限の接点に火を点じるような仕事であった。したがって、放送局自体も学校放送に対してはきわめて消極的であり、利用者たる学校もまた明治以来の教科書万能の教材観にとじこもって、教室の中にラジオをもちこもうとする教師を異端視した。先生は当時を回顧して、「何を好んで学校放送のような八方ふさがりの事業に手をつける必要があるかというのが、日本放送協会内部の大勢であった。」とっておられるが、敢然としてその難事業に着手されたのである。

デューイの高弟キルパトリックに師事され、児童の個性と創造活動を尊重する新教育思想を身につけておられた先生には、依然として古い教育観に立てこもる教師たちを開眼せねばやまぬという教育者としての使命観があり、そのもっとも効率的な武器として学校放送をとりあげられたのである。国家の権威によって定められた教科書の時代に、それがいかに困難にみちた根気を要する仕事であったかは誰しも容易に想像できよう。しかし先生は、情勢が困難になればなるほどますます闘志がわくという人であっ

た。先生の教育者としての使命観は強い男性的性格に支えられて、さまざまな抵抗を押し除き、学校放送を軌道にのせるとともに、放送教材の使用は教科書的であってはならぬという啓蒙活動を、あるいは著書に、あるいは講演に、精力的に展開された。先生がしばしば口にされる“learning by doing”、“concomitant learning”ということばが象徴するように、先生の放送教育観の根底には、児童の自発性を教育の基本とする理念が一貫して存在する。放送教育に注入主義・言語主義をもちこむことは、先生のもっとも忌避されるところであった。

以上は、学校放送の創設者としての先生の業績の一端を記したにすぎない。戦後まもなく日本放送協会を去られたが、財団法人日本教育放送協会の設立、月刊誌「放送教育」の発行、学校放送中央審議会委員、放送文化賞の受賞、日本放送教育学会の創設、教育放送番組の国際コンテストである日本賞審査委員会議長等々、学校放送35年の歩みに残された先生の足跡は燦然として輝いている。

昭和28年、先生はICUに招かれ、視聴覚教育センターの開設にあたられた。先生の理想はICUをして、日本はもちろんアジアにおける視聴覚教育のメッカたらしめることにあった。昭和29年夏にはじまる視聴覚教育研究協議会、1年おくれて開始された放送教育研究協議会は、その抱負の一つの現われであった。当時、小・中学校の現場では、視聴覚教育の実践と研究が行われていて、その指導・助言を求める声が高まっていたのにもかかわらず、大学側においては、それに応えるだけの準備ができていなかった。先生はまずこの点に着目された。先生の呼びかけに応じて、全国から教員養成大学の教職員が集まり、ICUの学生寮を宿舍として、朝から夜まで行われたこの二つの研究協議会は、ICUの年中行事として全国に有名になった。研究の成果は視聴覚教育研究集録及び放送教育研究集録として、前者は12号、後者は11号を重ねた。この間、二つの研究協議会を母体として、日本放送教育学会、日本視聴覚教育学会が誕生したのである。先生はまた日本通信教育学会の生みの親でもあった。そして通信教育においても、

視聴覚教育においても、電波媒体をもっとも効率的なメディアと考えておられたようである。アジアの非工業国における教育の普及には、学校を建てるよりも放送局を建てるほうがはるかに能率的であるというのは、先生の年来の主張であった。

先生はまた国際人として定評のある方である。日米学会の交流をはかられるとともに、欧米における国際専門家会議には幾度か招かれ、わが国で催される前記日本賞やユネスコ委託によるアジア各国の視聴覚教育指導者研修会、放送人研修会等にはなくてはならぬ存在であった。とりわけ議長としての、あざやかな采配ぶりは、まさに先生の独壇場であった。国際通信教育学会の副会長であられることもつけくわえておきたい。

先生に接すること30年、先生ほど開拓者としての資質にめぐまれた方はほかにしらない。いつも前向きで、老いを知らぬ人である。今や帝塚山学院大学学長として、さまざまな抱負に若々しい情熱を燃やしておられるにちがいない。以上もっぱら開拓者としての西本先生のハードな側面を描いた。それもはなはだ粗雑な素描に終って申しわけない。おわりに先生のソフトな側面について、ひとことつけ加えておきたい。先生は他人からたよられると捨ててはおけないという情に厚い寛容な人であった。就職や生活上の問題で先生のお世話をうけた人は数えきれない。私自身も多大の恩恵を蒙った一人であるが、先生のご期待にそうことの甚だ少なかったことを、ざんきの念とともに謹んでお詫び申しあげる次第である。